

国家資本主義経済の周辺史に関する移住民の生活史からの再考

中田 英樹

はじめに

本稿では、岩手県県北の内陸部にある「奥中山」という戦後開拓地を事例に取りあげ、敗戦直後の「緊急開拓事業実施要領」にて解放されたこの地へ入植した人たちが、どのような人間関係の変化を経て、現在の「奥中山高原」という県内最大級の戦後開拓地を形成してきたのかについて、そのプロセスを考察する。

本稿の対象事例にはじまる特徴はどこにあるのか。戦後開拓に関係する研究は、人文地理学や歴史学、農村社会学や農業史など、きわめて多岐にわたって蓄積されてきた。

そうしたなか、本稿ではおもに、関係者たちの生活史・個人史をベースとしている。具体的には奥中山開拓初期を知る方々への聞き取り調査に多くを拠っているが、パラグアイ「岩手村」における聞き取り、そして『〇〇周年記念誌』などに所収された個人史なども活用した。

だが本稿は、奥中山戦後開拓史をこうした人物の個人史をそのまま並べただけではない。また、取り上げた個人史そのものを、徹底的に言説分析するものでもない。本稿では、諸々の個人史が、奥中山というミクロな地域社会の内部にまつわる発言であるとともに、つねに彼ら彼女らを取り巻く地域農政や、東北に関する国家行政、あるいは戦後復興期における国家レベルでの動向、そして「V」節で少し触れるが、そのはてにての20世紀後半の世界的な動向——これらと連動したものとしてつねに意識し、関連させながら、各々の個人史・生活史を取りあげていこうというのが、本稿における分析の姿勢である。

こうした方法論を取りあげる眼目を、簡単に述べておきたい。例えば明治期から昭和初期にかけて多くを排出した南米への移民。あるいは戦後引き上げ時における満蒙開拓団。そして本稿が詳しく取り上げる戦後日本国内各地における開拓者たち。こうした人たちは、国家からの過剰人口として（しばしば「チベット」と喩えられることがなぜか多いが）不毛の地へと移住する

ことを強いられた。そしてそうした人たちを、国家行政のやり方を批判しようとする者は「棄民」として呼ぶこともしばしばあった。

だがこう書くことは俯瞰的に捉えたうえでのものである。そこでは、その「棄民」とされた人たちが、自ら独自のネットワーク（例えば本稿ではキリスト教関連の人的ネットワーク）をつくり、主体的・能動的にその置かれた状況を生き抜き、自らなりの描く未来へ向けて毎日を拓いた営為は、「棄民」と言ってしまうと零れ落ちてしまう。たとえそうした営為が、いくら国家行政の思惑通りだったとしても、彼ら彼女らはその「思惑」通りにコマのように動かされた、たんなる行為者^{エージェント}ではない。

重要なのは次の二点である。第一に、その「不毛の地」を生き抜いた人たちは、好き勝手に、無人島に流れ着いた者たちさながら自らの生活を一から何ら外部干渉も受けずに創りあげたのではない。そして第二に、だからといって外部たる地域農政や戦後の日本国家の高度成長に至る諸政策、あるいは世界的な動向のなすがままに振り回された犠牲者や傀儡でもない。肝要となるのは、この両者の緊張関係のもとで、奥中山開拓史たるものが、どういった人たちのどういった営為のもとで現在に至ったのかを、いま再び辿り直してみることだと考える。¹⁾

さて、こうした本稿の問題意識に基づいて、本稿における先行研究との関連について二点ほど述べておきたい。奥中山の開拓史は、次のような強い独自性を有している。

第一は、奥中山開拓は、ある特定の入植や開拓のパターンには収まらない、きわめて雑多な文脈の総体だという点である。①奥中山の戦後開拓は、[高瀬, 2012]のように、どこかの戦前から存在した村の「分村」として文脈化することはできない。②また、[蘭, 1988; 原田, 1998]のように、満蒙開拓団での人的関係が開拓団の基礎となった事例としても収まらない。③更には戦時中の軍での人間関係が開拓団として入植した者たちの人間関係のベースになった[高瀬・村上, 2011]とも言い切れない。

奥中山は、開拓地として設定された4000haという解放面積に、さまざまな経緯を経た人たちが、ほぼ個人プレーといってもよきろう形態にて入植した地である。そのような地にて、「拓魂不滅」の精神でもってここがさまざまに苦労を重ね、現在の「奥中山戦後開拓地」が成立したのである。だがこの孤軍奮闘の個人史・生活史は、一方で俯瞰的にみれば、戦後日本の高度成長へと向かう、近代化の産物でもあった。このミクロとマクロの両視点からの緊張関係のもとで戦後奥中山開拓史を再検討しなければならない。

第二はそんななかでも本稿では幾度も[江刺家, 1965]に言及している。江刺家は岩手大学の教授だが、同時に岩手県海外移住家族会会長でもあった。[江刺家, 1965]は、ほぼ唯一といってよい奥中山の戦後開拓期において現地調査を綿密におこない、かつその過程で1960年代初頭の、奥中山からパラグアイへの移民排出が重要な役割を担ったことも射程に入れた考察をおこなっており、本論にきわめて近いといえる。

ただ江刺家自身、岩手県海外移住家族会会長として海外移住を肯定する立場にあったため、彼の叙述は、①戦後の南米パラグアイへの移民排出が不可避なほど奥中山開拓者の生活が困窮きわまりなかったこと、②そしてパラグアイへの移住が（決して明治期での南米への「棄民」）政策のようなものではなく、確かに苦労を強いられたが明るい将来を築こうと南米移住者が成功していく様を、過度に強調している。このバイアスに対しては、本稿では、他の諸資料を同時に参照させることで対処したつもりである。

以上の点を踏まえ、本稿における奥中山戦後開拓史のストーリーを述べていくことにしよう。

1 曖昧で広大な荒蕪地での「奥中山」開拓

北海道を除けば、岩手県は都府県のなかで最も広く、四国四県合わせた面積とほぼ変わらない。それゆえに、岩手県には各地にたくさんの（開拓地候補となる）未開墾地が存在していたのだが、どういった気候風土に拓かれた地なのかによって、その後の展開は大きく変わる。

県南は平地が多く、また気候的条件からも稲作に適した地が多く、県北と比して安定した生活が成立しやすい傾向にある。また県南の多くは、東北で最大勢力を誇った伊達の仙台藩の領内であった。対して県北は気候条件的に米作で生計を立てるのは難しく、藩地としていた南部藩は、「南部のひとり飢餓（けじゃき）」と周辺の藩から擲擻され、農民一揆も突出して多かった。

東北内陸部を背骨のように縦貫する国道4号線。盛岡市から車で1時間ほど北上すれば「国道4号線最高標高地点」という看板が掲げられている。奥中山はこの最寄りにある集落だ。その標高ゆえ気候はまずもって寒い。無霜期間は百日強しかない。また、奥中山は火山の山裾にあるため、地質は火山灰質で酸性土壌であり、稲作や畑作には不向きである。

奥中山はしたがって、明治期にまずここに暮らしはじめたのは人ではなく馬であった。弘前の陸軍第八師団の三本木軍馬補充部中山出張所、つまり軍馬を育てる地だったのだ。

設立は1885（明治18）年。補充部の牧草地として設定されたのは、

8300ha という途轍もない規模だった（実際に原生林が伐採され開墾されたのはそのほんの一部分ではあるが）。東北本線が開通され、約6年経った1897（明治30）年頃には、有する軍馬数は千数百頭ほどにも達し、北は北接する一戸町の南部、南は岩手町の北部の一部までをも含む、馬の一大産地であった。²⁾

設置された軍馬補充部は、馬の世話人はじめ一定の現地雇用を創出し、また、こうして整備された駅からは、岩手県北一帯で展開されつつあった地場産業としてのキャベツ「南部甘藍（かんらん）」もまた出荷されていた。種子を北海道から持ち込んだ軍馬補充部関係の技師によって、地元の人たちへと普及され取り組まれていたのだ。³⁾

それでも、これらが必要とする雇用人口は限られたもので、やはり奥中山が圧倒的に多くの人口を抱えるようになったのは、戦後開拓地としての解放以降の話である。

2 戦後の緊急開拓による奥中山入植

2-1 戦後の奥中山の解放

戦争が終わったばかりの、1945年9月3日、岩手県に一通の通達が届いた。

終戦に伴い、軍馬補充部及び放牧地ヲ引キ渡シタシ、至急係官ノ派遣ヲ乞フ。〔奥中山教会、1995: 16〕。

マッカーサー司令による軍用地解放の指令である。直ちに奥中山の軍馬補充地への視察が行われ、軍馬補充地は解体された。

そして約二カ月後の同年11月、「緊急開拓事業実施要領」が閣議決定される。この施策は、枯渇している食糧を何とかすること、そして何よりも巷に溢れる引揚者をはじめとした生活困窮者たちへの対策にあった。軍馬補充部だった8300haのうち4000haが、戦後開拓地として解放された。

開拓者一戸あたり5haが与えられ、第一次入植希望者公募を経て一通り入植が落ち着いたときに採られた数値では、入植戸数577ということだった。315戸が、「どこから来たのかもわからない」純入植者で、残りの262戸が近隣村落の四男五男たちの増反目的による入植だった」という。〔農業殖産協会、1965: 3〕

入植した者たち自身と入植させた行政双方、「緊急」ゆえに入植後の発展へ向けたプランなどほぼ皆無だった。自ずと農業経験も土地勘もないヨソ者の方が離農・離村しやすく、近隣集落で生まれ育った者の方が、とりわけ開墾期の開拓初期には有利だった。

だから入植した人たちの階層が、全国的な戦後開拓者の中のどこに位置づ

いていたのかは、あまりにも入植者が多く、かつ多種多様だったため、一概にはいえない。1945年8月15日にはもう帰国して入植を意図していた軍の佐官クラスもいれば、焼け野原を彷徨い裸一貫で入植した者もいる。

さらには、それまでの農業経験から入植以降の雪解け時には生活の暮らしが逆転していた場合も少なからずあった。入植時には雪に覆われてわからなかったものの、駅に近い平地の山裾はじつは「大塚谷地」と呼ばれる湿地帯で、農業はおろか住居を建てるにも不都合が多々あった。対して西岳の山麓のほうが、林業には条件的に良かったともいえるからだ。優先して入植した佐官クラス（農業の知識などまったくない）と、近隣からの貧農の入植者との上下関係や生活水準が、雪が解ければ一気に逆転した、などと今でも奥中山では冗談交じりのエピソードとして残っている。ゆえにむしろ、開拓入植時と開拓後の生活における、入植時の階層の連続性よりも断絶性の方が重要だろう。

2-2 てんでバラバラの入植 —— 「ここなら誰の迷惑にもならない」

冒頭にも記したが、奥中山の戦後開拓は、あまりにも広大な原野に各々が好き勝手に入植したため、さまざまな戦後開拓研究の取りあげる事例のタイプが混成したものだ。奥中山の生き字引ともいえようの村山敬一（1928年生まれ。後の全国酪農協同組合連合会長）〔岩手年鑑、2000: 847〕は、戦前からすでに奥中山で暮らしており、後の1970年代には第三代目の農協組合長を努めた。彼はこう述べる。

奥中山開拓団が作られた時、政府も緊急開拓とかいろいろ政令を作ったのだが、戦後直後の緊急だったものだから、開拓団といっても、どこからどこまでの開拓とか、訳がわかっていないんです。〔中略〕各開拓団にしても、どこにどういう連中が入っているか、勝手に入ったんで。オレ関係ねーからここに入る、っていつて。〔中略〕「隣にさえ関係なければ、ここに入ってもいいか」という感じが入っていったんですよ。〔傍点筆者。以下、すべて同様。また〔 〕はすべて筆者による加筆〕

他から入った人も、樺太から引き揚げてきた人も、集まるわけだから。しかもどういう連中だか解らないんです。開拓営農資金は、現金で県の連中が持ってきた。それを農家へ〔八重樫開拓〕団長が馬に乗って配っていった。どこに何戸あってどうなっているのか、〔団長を除いては〕誰も何も解らなかつたんです。

この村山の言は、極めて意味深く、奥中山の戦後解放から入植へのプロセスを、最もリアルに表現しているといえよう。まったく、ある特定の入植者たちの入植以前の間人関係が、現在の奥中山に至る歴史を一気通貫するメカ

ニズムになっていないのだ。

だからといって、この600に近いほどの入植世帯が、すべて個人プレーで入植したわけではない。たしかに集落といった規模ほどには至っていないが、いくつかの入植前後で連続性を持った集団的な入植は存在した。

先の村山の言が根底にあるとしたうえで、いくつかその例を挙げておこう。まずは奥中山が軍事施設だったことは顧慮されねばならない。

ここは、弘前八師団の佐官級召喚人の連中も含めて、佐官級の連中がごっそり入った。なぜかと言えば、軍の軍馬補充部があった関係で、軍が敗戦になったから、これを解放するという関係があって、それが解っているものだから〔後略〕。(村山・談)

「緊急開拓事業実施要領」が発表される以前から軍の関係者は入植しており、そこには佐官クラスも複数混じていた。さらに敗戦はしたもののまだ血の気の多い下級兵士の連中が取り巻きのように入植していた。

このことはGHQも十分マークしていた。そうした者たちが再び日本帝国を復興させようとする集団にはならないかという心配だが、それは杞憂に終わったと言えよう。かくも厳しい地での農業経験などのない軍人は、すぐに奥中山を去っていった。僅かに残った軍関係者で佐官クラスの一人は、後の開拓団の中心人物の一人として活躍している。戦後開拓後が元軍施設だからといって、その後の開拓史に、終戦までの軍隊での人的組織が影響したことはほぼ奥中山では考えなくていいだろう。

次に入植した者たちの、引き揚げ以前からの人間関係が開拓地どれほど影響したのかという点を検討しよう。奥中山への入植者には、当然ながら満州や南洋諸島、樺太などからの引揚者たちもたくさんいた。いくつかの奥中山の開拓記念誌に掲載された、入植者の語る半生には、満州での経験が数多く登場する。

だが筆者の調査した限りにおいてだが、現在でも残る奥中山一帯に散在する集落のどこかが、ある一定の「外地」で終戦までに築かれていた人間関係をベースにしている[e.g. 安岡, 2014: 226-228]ということは、開拓一世の方に聞いても言及されなかった。

それでも、集落によっては特定の入植経路を共有するものもある。「日畜」集落などがそれだ。戦時中にここには、本社を川崎に置く日本蓄音機株式会社(後の日本コロムビア株式会社)の疎開工場があった。終戦とともに解散されたが、疎開工場での工場長にあった野沢義雄はそのまま残ることを決意。その部下たち25名も賛同し、この奥中山に適所を決め、根を下ろした。この工場長は開拓団の副団長になるが、だからといって奥中山開拓の全体的な

開拓史において、この人間関係が影響したとは言い難い。

あとは入植した世帯の約半分が近隣農村からの増反目的の入植者だったことも忘れてはならないだろう。戦後開拓農村研究では、「よそ者」として新たにやってきた者たちと、既存の住民との間の摩擦や協調に焦点を当てているものもあるが[永江, 2012]、奥中山では解放面積が大きかったことと、次のことが原因となって、そうした開拓地をめぐるトラブルはほぼ皆無であった。つまり、入植した者たちのなかには、交通の便のアクセスもよく、傾斜も緩い低地を好まず、逆に製材や製炭目当てに山裾上部のより「未開」の原生林を好んだ世帯もあった。自給農業での生活が難しいとの判断から、林業を生業にしようとした世帯であった。

このように奥中山は広大であるのみならず、各世帯の入植時の動機の多様性から、入植集落の分布形態は、決して駅近辺の中心部から同心円的に広がったものではなく、山の奥へも固有の目的で分け入った世帯が含まれる——このようにきわめて断片化され、多様な文脈が内包化されたのが奥中山開拓のはじまりであった。

2-3 奥中山開拓におけるキリスト教精神に基づいた諸活動

解放されてからの奥中山開拓地の歴史は、このように極めて独立性の高い各世帯の開拓プランの総体なものはあるが、それでも「奥中山開拓団」のメンバーはおり、彼らが一定程度のリーダー性を発揮して、奥中山開拓の舵をとってはいた。その舵取りにおいて、いくつか押さえておくべき点がある。すなわち、開拓団の「三役」——つまり開拓団長・副団長・事務局長——とも言えよう、現在でも奥中山開拓の「父」ともみなされる三人は、熱心なクリスチャンであった。このGHQの指示でもなんでもなく、「偶然としか言いようがない」（八重樫芳子・談）初代開拓団長八重樫治郎蔵はじめ、続いて決められた副団長（字「日畜」の野沢義雄）や事務局長（川守田麟三）がクリスチャンだったことは、少なからず奥中山開拓史に影響を残している。

例えば現在、奥中山には知的障がい者支援活動を展開する社会福祉法人「カナン園」がある。毎日夕方になれば、障がい者たちが職員の人と一緒に駅に向かっているのに頻繁に出会う。これら一連の施設は奥中山開拓時より浸透したキリスト教の影響を受けて営まれてきたものだと思う。

また、開拓時の「三役」がクリスチャンだったこともあり、奥中山では開拓の初期から駅の近辺に教会が建てられている。ここでは数多くの牧師による世界的な諸問題を考える会の開催や、女性たちが粗末ながらに収穫できる食料をやりくりするための料理教室など、さまざまな活動が展開された。

奥中山開拓が一定の安定をみせ、大規模酪農と高冷地農業への数々の試みが着手されるようになった時期にも、種子をはじめとしたさまざまな物資援助活動や、高冷地酪農センターやユースホステルの開設など、数々の活動が展開された。こうした「カナンの園」はじめ、この地を生きる者たちが創りあげた、国際キリスト教奉仕団などのキリスト教に関連した人間関係をベースにした諸活動は、奥中山戦後開拓史そのもののだともいえようが、戦後日本国家からの俯瞰的視点では決して捉えることはできないはずだ。

3 奥中山開拓の始動 —— 貧しい自給生活から大規模酪農への乗り出し

3-1 開拓団中心メンバーに胎動する大規模酪農という途

奥中山が戦後開拓地として解放される以前から入植していた、将校クラスを含んだ軍関係者たち—— GHQ はこうした人たちへの牽制足り得る開拓団を送り込もうと検討するなか、開拓団長として八重樫治郎蔵の名前が挙がった。

八重樫治郎蔵は 1881（明治 14）年、現在の北上市に生まれ、戦時中はハルビンの幹部訓練所に入り、満蒙義勇軍の青少年の教育に努めた。将来的にはハルビンに「岩手村」をつくりその団長にと目されていたという。終戦を機に岩手に帰り、今度は「蒙古には肺結核患者がいない。それは馬の乳を発酵させ発酵乳を常飲しているからだ」と述べるとともに、岩手の区界高原地区（現・宮古市区界）にて、終戦で不要となった軍馬の牧場をつくり、馬乳を生産供給することで肺結核を絶滅させ、馬産の振興にも貢献させよう—— ならば一石二鳥だと『区界高原開発整備促進案』なる建白書を自前で作成し、県に提出していた。[拓魂不滅：12-13]

満蒙開拓時に開拓訓練資格を取得していた八重樫は、県内 61 カ所の〔開拓〕連盟委員長でもあり [八重樫，2016：59]、奥中山の開拓史における一定数の人たちに強い影響をもたらした。そのひとりが「次世代リーダー」ともいえよう、村山敬一（1927 年生まれ）である。八重樫の奥中山を畜産にて発展させようという意志は、奥中山という現場での開拓中心メンバーにおいて、次世代へとしっかりと受け継がれるのである。

入植時にはすでに老年期に差しかかっていた八重樫は、開拓団長という職務上、盛岡はじめ全国各地へとしばしば出かけていた。そして当時、青年だった村山は奥中山駅で改札員をしていた。村山は、父、村山敬佐が戦前の 1937（昭和 12）年に小学校教員の僻地赴任として奥中山にやってくる以来そのまま暮らしていた。敬佐もまた八重樫とともに、戦後の奥中山開拓をそ

のはじまりから中心的メンバーとして活躍してきた人である。軍役を終え、奥中山に戻ってきていた村山敬一は、知人の誘いもあって、とくに奥中山での将来計画もまだ持たぬまま駅で働いていた。

八重樫さんがよく駅に来て、お茶ついで、いろいろ話をしている。〔中略〕デンマークの話は絶対に忘れない。それは、教会を中心とした街づくりということで、酪農をやる、と。デンマークはかつて、スウェーデンとか隣国と戦争をして負けて、小さい国になった。けれども、そこを再建したのは、グルントヴィ¹⁰⁾であるとかいった話とか。そういう話をしていた。

また村山敬一は、八重樫治郎蔵の息子、鉄男とも親交が深かった。鉄男は北海道の（キリスト教関係の）酪農短期大学に入り「三愛塾」という勉強会に参加していた。そこに村山は20日ほど訪れ滞在している。

そんななか、サンフランシスコから来た日系牧師、酪農短大主任神塚アーサーから、知り合いのウォーレン（Earl Warren：カリフォルニア州知事）が、近々講和条約が結ばれること、ウォーレン自身、州知事をリタイアするつもりであり、日本の青年を呼んで、カリフォルニアの農家にホームステイさせながら酪農経営を学ばせる計画を予定していることを伝え聞く。「奥中山は高冷地で米が厳しいから、酪農をやりたいと思っている」と言う村山に、先のアーサー牧師は、この米国農業留学を強く推した。

そして1952年、米国派遣農業研修生の公募が盛岡で公示された。村山はこれに応募し、カリフォルニアでトレイニーとして滞在、大規模酪農経営の強みを経験する。これは八重樫の述べていた構想に、村山自身が強烈に共鳴する大きな機会となった。

八重樫の酪農による開拓構想とそれを受け継いだ村山の経歴、一方での開拓団リーダーたちが影響した教会を拠点とするキリスト教の精神に基づく生活改善運動——こうした奥中山戦後開拓のはじまりは、「戦後の日本国家→県の農政→現場奥中山での農政」といったトップダウンの関係のもとで繰り広げられる文脈に決して収まるものではなく、クリスチャンであった八重樫家の教会関係の人的ネットワークを下敷きに、八重樫から酪農路線を受け継いだ村山における、広くはカリフォルニアにまで開かれ展開されてはじめたプロセスであったことは、ここでも確認できよう。

3-2 ギリギリの借金生活を送る奥中山の人たち

かつては馬しか暮らせなかった奥中山。ゼロから開拓をせんと西岳へ人たちは登っていった。見渡す限り、ササ、ススキ、雑木に覆われた原野である。

荒屋も、冬になれば夜に降った雪が天井から零れ落ち、朝に目覚めれば布団に雪が積もるようなこともあったという。衣食住の最低限度の物々すら入手は困難を極めた。

ただでさえ厳しい生活環境に奮闘する奥中山の入植者たちに、まるで嘲笑うような不運な天災が重なった。1946年の開拓初年から180cmという積雪に見舞われ、1948年にて初霜が降りたのは9月の19日、翌10月には雪が降りはじめた。もっと酷かったのは、1953年の冷害、翌1954年の霜害、1955年には雑穀価格の大暴落、翌1956年には再び冷害がこの地を襲った。[江刺家 1965: 31]

食料は米の配給は皆目不十分で、トウモロコシの粉、大豆の粉、大豆カス、今の世の中では家畜のエサでしかないような物を食べていた〔中略〕。種を播けば収穫できるものと思い、百個の穴を掘ってカボチャの種を播いたが、一つも出来なかったり、1アールの畑にヒエの種を1斗も播いても、ものにならなかったというような笑い話も数多くあった。(野沢タツミ「戦後の開拓地に入植して」〔奥中山教会、1995: 32-33〕)

まずもって近隣からの増反目的の入植者でなければ、奥中山のような厳しい条件下での農業に関する知識をまったく欠いている者が大半であった。入植期からすでに稲作に期待を込めるのは見当違いだった。稲作以外の雑穀の畑作であれ、そして酪農であれ、何らかの農業が成立しかけるのは、入植から10年あまりが経ってからのことである。

昭和30年代に入ると、国営北岩手開拓建設事業や、国営北岩手草地開発事業が実施され、畑作や畜産振興の基盤が形成されました。これをきっかけに、奥中山地区では酪農、じゃがいも、キャベツなど、北海道型農業に転換していった。⁵⁾

また、奥中山での入植者たちにおける、自らの生活を確立させるための林業も忘れられてはならない。農業では生計の立ちにくい極寒の奥中山ならば、とくに製材や製炭といった用途に向けて的林業は高い価値を有していたはずだ。

「米作は無理でも雑穀は自給用に栽培したい」「あるいはビートやじゃがいもを栽培する」「山へと分け入り薪や木炭のための木々を取る」などといった行為は、入植世帯自らの自給的生活である。現金を得るといふ経済的発展が見込めない開拓当初においてはなおさらのこと、入植者各々は、自ら生き延びるための衣食住にまつわる諸条件を自前で整えようとしていたのだ。

そしてこれは酪農においても同様だった。1946年にはすでに、奥中山開拓推進基地農場が設立されており、県北開発の拠点として農林省が設置、

1947年から牛乳の生産が開始されている。そして現在では、「奥中山高原」ブランドを確立させて大規模酪農地帯として日本有数の牛乳を出荷する大規模酪農地帯奥中山となったのだが、この開拓当初からはじめられた酪農もまた、牛乳生産地帯として地域外へと量販されるようなものではない、幼稚なものだった。

戦前の奥中山地域での乳牛飼育の記録は残されておらず、この基地農場の設立が奥中山における酪農振興の直接のきっかけとなったといってもいい過ぎではありません。〔中略〕

〔酪農経営といっても〕乳牛1、2頭がせいぜいで、一升瓶に牛乳を3、4本リュックに背負い、毎日基地農場まで運んだものでした。牛舎といっても、掘立の藁囲いで、冬期間の吹雪の日には牛舎の中にも真っ白に雪が溜まっていたという人もいます。〔中略〕

粗飼料は夏場は野草を主体とし、冬は稲藁、稗から野干草を取って切り刻み、飼槽に入れてお湯をかけ、フスマ、大豆などをまぶして、いわゆるドブ飼養として使用しました。〔夢・人・大地：76-77〕

〔江刺家、1965〕は、1962年に農水省によって行われた実績調査結果をもとに、奥中山での入植世帯を「将来的に見通しが立てる」から「ほぼ絶望的」まで四段階に区分分けしているが、それによれば約半数の入植世帯が、そのまま奥中山にいても将来は見込めないと結論づけている。

だがこの江刺家のランク付けは、慎重に捉えなければならない。いずれの入植世帯も借金でほぼ首が回らなくなっている。いずれの入植世帯もやっていることは同じである。借金を重ね、なんとか規模を拡大しようとする。江刺家のこのランク付けは、返済の見込みが立つのか否か、この一点であり、ただ経営規模と、多重債務を比較しただけのことである。そして約半数は、この「自転車操業」は近いうちに破綻するランクに分けてているに過ぎない。

入植当初には、新開墾に対して国から開墾費補助金として若干の金が交付され、この金はすべて食糧や地下たび、その他の配給品の支払いにあてられた。政府融資の営農資金も、いつの間にか生活費にまわされて、それが最初の借金となった。数年たたぬ間に借金は当時の金で5万円位に積もっていった。〔江刺家 1965: 28〕

戦後開拓地へと入植した人たちは、決して「見捨てられた」などとして話を終わらせてはならない。このように入植世帯は、入植する時にすでに、借金を貸し付ける「上客」だったからだ。開拓入植時における開拓支援金や営農支援金などの多種多様な融資である。だから「棄民」という呼称は適切ではない。間違っても筆者はここで、戦後の日本経済が、開拓地へ送り込んだ

入植世帯を手厚くアフター・ケアをしたといたいのではない。まったく逆である——そんなに資本主義というのは甘くない。もっと冷酷で狡猾なのだ。

国家の資本主義経済のシステムは、そのシステムの周辺領域へと人口を置き留めることはあれ、システム外へと掃き去ることはない。これは本稿後に述べる、1960年代前半の奥中山からパラグアイへの移住推進政策に関しても同様である。資本主義経済のシステムは、過剰となった人口をにつねに被従属の関係で繋がれた周辺へと置き留めておこうとするのであり、手の届かない荒野のシステム外へと棄て去ることはない。

いつでも必要が生じれば、そうした人口を都合よく動員できるよう、繋ぎ止めておくのだ。そうでなければ、高度成長期に都市部にて労働人口が不足したときに、集団列車に乗り込んだ「金の卵」たちとは、いった誰だったのか。

3-3 国策と軌を一にした酪農の大規模化と、それに伴う多重債務

奥中山では大規模酪農経営が生活向上への最適な選択肢なのだろうか。いろいろな将来設計を思い描く各入植世帯だが、そのうちのどれほどの世帯が、村山がカリフォルニアで経験した機械化された近代的酪農経営を具体的に描いていたのかは知る由もない。中には、ただたんに行政の言うままに融資に別の融資を重ね、ドンドン借金を膨らませていった世帯も多かろう。

部落のみんなはこう語る。ワシらは全部がゼロから出発した。県からいわれたとおり最初一戸当たり3頭の牛を導入した。7年経って3頭では経営が維持できないと5頭を進められた。そして現在は20頭でなければダメだという。ゼロの悲しさで県のいうがままに牛を増やし、畜舎など施設を作り替え、草地を増やしていった。〔中略〕県では、この「借金部落、をいまお酪農専業農家が集団としてかたまっており、立地条件、広大な未利用地など畜産の開発拠点として三指に入ると説明、今後、北上山系開発と結びついた営農指導を強化すると景気よくぶった。だが、受けて立つ部落の人たちは二度と「踊るまい」と警戒心を強めている。〔江刺家 1965: 173-174〕

ここで、奥中山からパラグアイへの移住という文脈を意識しつつ考察を展開した江刺家[1965]を（批判的に）引き合いにだすことには意義がある。江刺家は、奥中山からパラグアイへの移住を望ましい選択肢だと主張するために、奥中山での生活がいかに前途多難であるかのかを詳細に内部観察する。

だがしかし江刺家は、その意図のあまり、ある一点を（知らないはずはないのだが）無視する。例えば彼は次のようにいう。

この収入不足を酪農経営に切りかえて打開する事を要望するものが半

数近くあり、酪農への熱度は次第に高まりつつあるが、いかせん年来の借金（1戸当たり平均61万円）という重荷が、大きくなるのしかかって、生活をおしひしいでいる為に、現在の生活から脱し得ぬ悩みが、いつ解消するともなくつづくのである。〔江刺家、1965: 38〕

『北上山地に生きる』と同様、この〔江刺家、1965〕においても、ひとつ、叙述の仕方が共通している——戦後の「猫の日農政」とも言われる次々に豹変する国策や農政政策や無謀な計画、そして、それに振り回された「犠牲者」としての農民という描き方である。

営農の融資や開拓の融資、生活支援の融資。あちこちからお金を「つまんで」は目先の返済に充てる。この状況を解決しようと奥中山農協が動いた。あちこちからの借金を農協で一元化しようという債務処理計画である。

だがこの一連の流れにおいて、中山農協で組合長をしていたのは、村山啓佐を（八重樫治郎蔵を扶んで）継いだ、三代目組合長たる息子の村山敬一であった——江刺家が強調し（たがら）なかつたのは、この村山敬一が、開拓者の首を絞める筆頭としての農協のトップ人物であると同時に、農政に振り回された「犠牲者」たる奥中山住人の「最多借金者」であるという点である。

筆者が、村山敬一から組合長としての苦労話に関する話を聞いていたときに、彼は奥の部屋から一冊の本を取りに行った。「借金部落」と奥中山を名指した、本稿でもすでに何度か引用している『北上山地に生きる』である。ページを捲り、ある箇所を私に指差した。

岩手県営農開拓課の調べでは負債は総額7億2000万円にもなり、すでに償還期限がきて返済していない延滞金は2億2000万円にも達している。一戸あたりの平均借金額は250万円だが、7、800万円クラスが多く、〔中略〕村山敬一さん1800万円——といった具合である。〔中略〕「こんなことやっているほうがアホウだ。出かせぎでかせいだほうがよっぽどましだ」——大規模経営者とは思えない発言が人々の口からあとからあとから続くのだった。〔北上山地: 173-174〕

繰り返すが村山こそが、奥中山の戦後開拓における農業発展を、初代開拓団長八重樫を引き継いで切り盛りしてきた中心人物である。この『北上山地に生きる』では、「国、県の奨励で〔奥中山の〕全戸が酪農に取り組んだ」〔北上山地: 172-173〕とされ、結果として部落住民たちが借金漬けになった犠牲者として紹介されている。

だがその「借金部落」奥中山の、それももっとも借金を抱えたと記された本人が、誇らしげに、そして少し苦笑いを交えた表情で私にこの箇所をみせたのだ。

4 奥中山の地域社会構造的な近代化への変容

4-1 村山における一層の「攻め」

米国カリフォルニアでの農業研修留学から帰国した村山は、さっそく葛巻に行き牛を二日ばかり歩いて、奥中山に連れて帰った。とまれ牛の種類は、日本短角種というもので、肉牛でありながらも比較的乳量が多いのが特徴である。

まだ「幼稚」な零細農化がひしめく奥中山で、村山の眼差しは遙か遠くを見つめていた——「アメリカに行って勉強したせいもあってか、経営規模をおっきくしてやらなければならないと思った」。また彼は、いかに牧草の成分バランスの良いものを確保するかという点にも拘っていた。当時は現在のようにトウモロコシなどを色々混ぜた濃厚飼料ではなく、せいぜいフスマ⁶⁾があるくらいだったから、牧草の質は重要であった。

こうして彼は手綱を緩めることなく、「攻め」の姿勢を貫き（だからこそ奥中山一の借金農家となり）、1970年頃までには毎年250トンほど、1970年代半ばには300トンを超える牛乳を出荷するに至っていた。所有乳牛約120頭（うち、搾乳段階にある牛が80頭）ほど、サイロは200トン以上、50haは超えるかという牧草地（村山・談）——借金まみれになりながらも、「攻め」の姿勢を崩すことなく、大規模農家への途を自らの手でこじ開けたのだ。

一方で地元農政サイドもまた、1960年代から、大規模化を遂げようとしていた奥中山の酪農家に対して、耕運機やトラクターなど機械化へ向けての設備を次々と導入し、貸し付けるようになった。奥中山の開拓から約20年が経とうという頃である。

ところが収入がないものでそんなことやってるものですからね。だから昭和40年代は、中山農協に金貸すな、と。言われた頃ですよ。当時はですね、国の金融機関があったんですよ。農林業金融公庫。国の金融機関。国民金融公庫。こういう所は低利子で借りれたんですよ。ですが一銭も返せなかったんですよ。それが、奥中山のはじまりです。（村山・談）

4-2 大規模化農政のはじまり

終戦までは、おもには石炭や製炭のための国家領土としてしか価値を見いだされてこなかった北東北内陸部だが、戦後史のなかで大規模酪農地帯、さらに後には一大総合リゾート地としての国土として利用できることにも着目

した国家は、その目的に合わせてそこに不必要な人口を引き抜き、もっと人口が必要となりつつあった都市部の単純労働者として動員しはじめた。「間引きして緩和する為」[江刺家, 1965: 42]の、例えば1960年の「過剰入植者対策計画」などはその最たる例といえる。

規模を拡大させよう。機械化を進めよう。そしてここで付け加えたいのは、見込みのない農家には、離農するか離村してもらい、意欲ある農家へと集約化させよう——1964年に至っては、「開拓者離農助成対策」としてさらに「開拓地」が絞り込まれて対象化され、終戦直後に移入させた人たちを、今度は大規模化へと引き抜く姿勢へと行政は入る。例えばこの「開拓者離農助成対策」では、離農農家には一戸あたり45万円が支給された。

この文脈でよく忘れられるのが、戦後の僻地農村や山村などからの過剰人口に対する、ラテンアメリカへ移住させようという働きかけである。各種海外移住に関わる諸機関は、1963年、外務省の外郭団体としての「海外移住事業団」へと統合された。奥中山含む岩手からパラグアイへの移住者数の最盛期は、その翌年の1964年(11家族)である。[農業拓殖協会, 1965: 1]

だが、「集団列車」に象徴されるように、東北から集団で上野行き列車に乗った若者たちは、日本の高度経済成長を底辺にて支えた「金の卵」として戦後日本史に書き込まれる一方で、こうした南米への戦後移住者たちは、戦前からのラテンアメリカへの移民たちとひとくくりにして対象化されるか、そうした人たちがいたことすらも言及されたりしない。⁷⁾

だが、先の「開拓者離農助成対策」を再び引き合いに出してみたい。この政策では、開拓村からの離村者に対しては、その離村農家が海外にまで移住するのであれば、その額は50万円にまで増額されていた[江刺家, 1965: 44]。

では、こうして大規模化の行政政策に「貢献」して出ていった人たちは、以降の奥中山史から去っていった人たちとして物語から消えさせていいのだろうか。彼ら彼女らの南米移住とは、たんに戦後農政に都合良く従うこととなった「手間と金のかかるいわば厄介者を、農政は切り捨てた」[野添, 1978: 16]だけでしかなかったのだろうか。

奥中山の開拓史は、この文脈では終わらない。「第二の奥中山」というべきか。奥中山は新たな「村落共同体」へ向けての大きな質的変容を、この村山のいう「攻め」の姿勢の先に踏み出すのである。

5 全開拓世帯の「白紙撤回」と奥中山社会の形成

5-1 奥中山の大規模酪農化への大障害

まずはもう一度、奥中山が戦後開拓にて解放された時点にて、入植した人たちのその入植地選定の判断事項には、次の重要な二点があったことを再確認しよう。

第一は、「隣にさえ関係なければ、ここに入ってもいいか」と村山が端的に述べたように、入植世帯各々が生き延びるために働きかけようと入植した開拓地とは、隣近所のそれらには彼らないような場所であったという点である。

そして第二は、入植者皆が、交通網や役場へのアクセスが容易な山裾低地ではなく、製材や製炭を当てにより山頂に近い山奥を選好した場合などが多々あったという点である。奥中山への戦後開拓入植時における選定は、決して何かを中心にして序列化され得るものではなかった。林業に関連した諸条件や、沢の水脈状況など、解放された後の山裾一帯の土地は、例えば現在のように「高齢地酪農センターからの距離」などといった物差しでその価値が序列化されていたものではなかった。

この二点にもとづいて、奥中山の戦後高度成長期に至る開拓史は刻まれてきた。とまれマクロレベルの戦後史はそのなかで、豊かな製材や製炭用の樹々が必要でなくなっていく、どう足掻いても自給用の農業では生活が成り立たないことが入植者らの間で痛感されていき、地元農政が推進する大規模酪農家あるいは離農・離村の経済的支援政策に同調していく一途にあった。ゆえに奥中山の戦後開拓史は、その「発展」への選択肢を酪農の大規模化の一択へと絞り込んでいくなか、酪農という作業における「利便性」という一本の物差しの上で、各入植地が序列化されていくようになっていく。

こうしたなか、てんでバラバラに散在する入植世帯は、各々において、奥中山が酪農の大規模化とりわけ集約化へと向かうために、何らかの手がうたれるべきだと考えられるようになっていった。

5-2 奥中山での全入植世帯の「白紙撤回」

当時の農協組合長・村山啓佐（村山敬一の父）、参事・西館英治をはじめとする役員一同は、こうした窮状の打開のためには、経営規模の拡大と適地適作としての酪農の振興、自家米の確保を図る以外にないとして、昭和32〔1957〕年、全国に先駆けて土地の配分是正協議会を設立し、ここで土地の配分是正を計画、売渡農地の白紙還元を行政側に強く訴えかけました。〔夢・人・大地：72〕

1957年に発行された「開拓営農振興臨時措置法」を利用するように、奥中山農協は開拓地を一から新たに作り直そうという案が決議された。すべての入植世帯に対して呼びかけ、賛同した世帯において、それまで自ら切り拓いて作ってきた家や畑、牧草地などを、すべて一旦白紙に戻し、大規模酪農家や高冷地野菜農家の連なる一大農業生産地帯へと再整備しようというわけである。

まずは道路である。この白紙撤回案決議までに、奥中山の人たちの使っていた道は、人の社会に適応したものではなかった。それはかつての軍馬補充地だった時代、馬々が牧草求めて作ってきた獣道であり、それはしばしば当時の入植し拡大していた家々の畑や牧草地を横切ったりしていた。

どこが道路だったかという、軍馬補充時代に馬がずうっとあの、歩くところが、土塁で決まっていたんです。〔中略〕馬がだいたい歩いたところとか、そういう所が、道路になっていて、そこの脇に〔開拓者たちが〕入った、と。

で、開拓で登記がはじまったんだけどですね、昭和30年代になってから、だんだんに生産者も牛乳が出てきたりしてきて、あとは肥料を運んだりしてきて、そうする間に、道路っていうのは適当に、ここの土地の人に迷惑がかかる、ということにもなるわけです。〔中略〕ということで道路をちゃんとやる必要がある、と。そういうことで、道路計画を、組合で作ったんです。(村山・談)

馬の作ったクネクネの獣道では、今後さらに大規模化が進んだとしても、飼料搬入や乳牛搬出でのトラックが通ったりすることはできない。既存の奥中山開拓地の道路網は、人間社会に適した道路網として上書きされる必要があった。西岳山裾の再低地から西岳の山頂に向けて、新たに砂利道（現在では立派に舗装されている）の道路が、綺麗な蜘蛛の巣のように新たに開通された。

道路問題に加えて、それまでに登記されていた各世帯の宅地や農地、牧草地の白紙撤回と再配分もまた重要である。山裾の駅付近から、いくつも沢を隔てた山の奥地まで——人びとがてんでバラバラに入植し、開墾してきた「我が開墾地」は、その蜘蛛の巣状に再開発される道路に沿って代替する宅地や農地に互換され、「この道路沿いの此処から此処までは誰々さんの土地」というように、並び替えられた。

だが白紙撤回にて放棄した住居や牛、畑などは、新たに配分された先においては、幾程の価値に等しいかは自ずと異なる。先に述べた、各世帯の開拓地を価値評価する一律の（大規模酪農経営という観点から作られた）物差し

が、奥中山たる地にボヤッと散り散りに存在する各開拓地を貫ぬくからだ。もちろん中にはこの計画に乗らなかった（特に西岳の山の奥深くの）家族もあり、現在でも行政的には「奥中山」の域内にありながら、荒蕪地に等しい地を隔てて暮らしている家も少なからずある。

だがこの計画を実施するために、奥中山は行政に対して「開拓営農振興臨時措置法」に則るかたちで補助金を申請。それを受けての実施であったが、金額的にも、実行的な側面においても、この計画がすんなりと行くわけはなかった——この「白紙撤回」計画と、その「すんなり行くわけがなかった」プロセスそのものこそが、本稿にて最も念入りに考察したい点である。少なくとも「奥中山戦後開拓史」においては、ここで決定的な断絶性を孕んでいるのである。

5-3 奥中山という地域社会の誕生

道路の再整備と、入植者各々の移動は、きわめて重要なプロセスを含んでいるのだ。これらプロセスにおける度重なる奥中山に暮らす住民間での話し合いと、それによって繋がった「隣人」という点においてである。

第一点目として道路網の刷新から考えてみよう。駅近辺の低地に新居（と畑や牧草地）を宛てがわれた人にとっては、山の高くまで引かれた道路が綺麗な砂利道だろうが関係ない。

だが、「話し合った」との表現しか筆者は聞いたことがないが、村山敬一は「とにかくも関係者が話しあった結果、費用は一律負担との合意に至った」と述べた。この砂利道整備の費用負担にまつわる議論そのものが、奥中山の入植者たちが顔を互いを知るようになり、隣人となっていくプロセスとなったはずだ。奥中山開拓の第一世代を父に持つ一人は、筆者に「覚えてますよ。オレが幼少の頃、オヤジや何人かの男が夜に、何度もウチに集まってはずっと話し合いをしていました」と述べた。彼の父もまた、この計画実行の中心メンバーだった。

そして第二点目として——新たな「我が開拓地」の代替をめぐる議論は、それよりも格段に熱を帯びた話し合いの連続だったと筆者は考える。

いま一度、村山の言を確認したい。「お隣さんとはいえ、沢をひとつ隔てていれば、誰が何をしているのか、さっぱりわからなかった」——ここに、血縁関係はなかりとも「同じ奥中山に生きる住民」という意味における、人びとが密な人間関係を結んだなかでの共同体社会はない。だが、この土地の再配分は、この関係こそを一気に逆の意味へと刷新する。「何度も集まっては話し合いを」繰り返すなかで。

その一：自分の土地の境界を超えれば、そこは隣人が働きかける土地となった。土地の再配分によって、奥中山の中心部、駅を起点に拡がる少なからぬ面積の土地は、私的所有地として、境界が明確に引かれ、「誰々の土地」として地図にびっしりと色塗られた、という点である。

これによって、離農あるいは離村した者たちが売却した土地は、隣接する隣人の土地と連続することが可能となり、またその隣人の開拓した地と自らの地が地続きだからこそ、その「購入」に前向きになれたことだろう。ここで「購入」と「 」を付けたことにも筆者なりの意図がある。土地であれ、家屋や牛舎であれ、おそらく殆どのそれら「購入」したものは、売り主が融資を受けて手にしていたものである。つまりこの「購入」は借金を肩代わりすることでもあるのだ。よってこの「購入」は、経済的に豊かな者の「投機目的」や「資産運用」などでは収まらない高度な危険を承知した上のものであり、多重負債で首が回らず離農（出稼ぎ生活に入ることに多くは至ったであろう）や離村する隣人を少しでも支えたいという顔の見える人間関係で結ばれたがゆえのことでもあったはずだ。江刺家[1965: 46-48]も述べるところだが、村山もまた「〔購入の際には〕少しでも金をもたせてやった」という表現を、筆者との聞き取りで用いた。

その二：そして土地の再配分をめぐることは、さらなる考察が必要だ。単位面積あたりの価値評価は、自ずと酪農経営という一本の物差しから逆算された便の良し悪しで序列化される。集乳センターに近かったりすれば、その牧草地や牛舎は高評価されるであろうし、地形的にアクセスが困難な要素があればそれだけ評価額は低くなる。

だからこそ「話し合いは何度も持たれた」のであり、それは決して「難航した」という負の側面ではなく、「何度も話し合った」という継続的な機会における、その忍耐と妥協の孕む能動性こそが重要だったと、本稿はここで言いたいのだ。話し合う場において、各世帯の転居前の開拓の日々の頑張りが、「誰が何をやっているかわからない」状態では成立すらしまい。逆に幾度となく重ねられた話し合いのなかで、「何をどれくらいやってきたのか」ということが、各々において他人に主張され、逆に見積もられるからだ。

とにかくも「てんでバラバラ」の入植は見直さなければという点では一致している。だがそれに向けては、難航極まる議論が不可欠であり、難航極まるからこそ、誰しもが相手の心境をも察することができるようになるのであり、そして互いの間で妥協が産まれ、着地点が決まる。1960年代前半に数を最大にさせたパラグアイへの移住者送抜も、この再整備抜きにはありえなかった。

5-4 奥中山の戦後近代化そのものの産物としての奥中山村落共同社会

このような経緯を経て、岩手県北の西岳東裾にひっそりと広がる奥中山たる地は、たしかな顔を突き合わせ、馴染みとなった人たちによる凝集性を持った地域社会となった。それは決して、戦後解放での入植時にすでに存在したものである。奥中山なる内陸の生活条件の劣悪な「不毛の地」における、大規模酪農を軸に近代化していく現代史そのものの産物と言った方がよりの的を射ているだろう。

統合・合併を繰り返し、現在では「JA 新いわて奥中山支部」となったJAに偶然埋もれていた内部資料のなかに、『奥中山高原ルネサンス計画』という一冊がある。発行の日付はない。その巻末に一枚の絵が見開きで載せられている。「全体パース」と題されたカラーのこの絵は、おそらくは農協時代に立てられたこの計画のめざす理想の奥中山像である。現在の集乳センターの周りには酪農はじめさまざまな大規模酪農の施設が並び、近代的な牧場地帯や住民たちの集う憩いの場としての公民館や公園の風景が広がる。⁸⁾

奥中山で長く暮らしてきた、JA 新いわて奥中山支部の大欠支部長（2016年当時）は、この絵を筆者が見入っていた時、こう述べた。「これが村山さんの抱いていた未来の奥中山のイメージだと思います。そしてそれを継いだのが〔現在の奥中山では三指に入る酪農家である〕松川さんだと思います」。筆者は村山に後日お見せしたが、「まあ、そんなところですかね」とのことだった。JAで聞けば、この「全体パース」が描かれたときの組合長が村山敬一、そして「そこに同席していたであろう」松川は専務であった。

奥中山の開拓当初を知る方は、開拓から約七〇年が経った現在、そう数多く御存命ではないが、いまでも一人で車を運転して走り回る田中恒男（1932年生まれ）がいる。

八重樫初代団長の義理の娘、八重樫芳子（1936年生まれ）に同行してもらい、筆者がその田中の家を訪ねた時だ。先述の「白紙撤回と土地の再分配」についてのことや、その約5年後に興隆期を迎えた奥中山からパラグアイへの移民たちについて話を伺っていた。

そんななか、筆者は先の「全体パース」の絵をみせた。「村山敬一さんが抱いてらっしゃった像はこの奥中山だったのでしょか」と筆者が問うたところ、田中は次のように述べた。パラグアイへの移住者たちに絡めての発言である。

「やっとなら先が見えてきたちゅー時によ」。

こう田中が言ったときに、それを聞いた八重樫芳子は、筆者に向かって間髪入れずにこう付け加えた。「そうよ。やっとならこの奥中山が…〔夢

のある将来像が実現性を帯びてきたのに、なぜまた南米などへと出ていなくても、という気持ちは、それはやはりありましたよ」——もちろんこれら発言の意図は明らかである。借金に借金を重ねつつ、失敗に失敗を繰り返しつつ、やっと酪農で自立した経営成立の可能性が見えてきたのだ。そんなときになぜまたこの奥中山を去るのか——筆者にとってその想いは十分にわかる。

だがこれら言には、一捻りしたところに重大な問いかけが書き込まれてはいないだろうか。「やっとなんかから出てきたというときに」(移出なんて)——それは同時に逆でもあるはずだ。移出する者たちが出てこれたからこそ、明るい未来が予見できるようになったのではないか。

奥中山に入植した酪農家が大規模化できたのは、離農したり、離村して他地域へと移出したり、また、そうした南米への移住者を含めた多くの人らが、(沢を幾つも隔てた関心のない「向こう」ではなく)牧草地が接するくらいの距離に「隣人」として居たからこそのものであるはずだ。開拓初期のような、隣が何しているかわからないという関係ではなく、別れを惜しみ、去る者の牛を引き継いでやろうと心情通う隣人だったからこそ、去りゆく者たちの身辺整理が可能(財産処分と借金帳消しができる)となり、奥中山に残り暮らし続けた者たちに、大規模化という「これからが見える」路が拓けたとは言えないか。

「隣人」が去ることそのものが、奥中山での規模拡大化を可能としたのだ——奥中山における大規模化・近代化へのダイナミズムとは、戦後の奥中山から日本の都市部やパラグアイの「岩手村」へ移住した者たちと残り続けた者たちとの人間関係そのものなのである。

6 おわりに ——パラグアイへ移民した者たちの同時代史

パラグアイへと戦後奥中山から数多くの人たちが移住した。その者たちが移住後にどのような半生を辿ったのか。そのいわば「パラグアイ編」に関しては、期を改めるとさせてもらおう。ただ、戦後に奥中山から、過剰人口だとして南米パラグアイに移住した者たちとて、決してその時点で日本の戦後史から弾きだされ、棒外へと押しやられた者たちではなく、十二分に現在の日本経済社会において、絶対に欠くことのできない人たちだという点は押さえておきたい。具体的に次の二側面は、少なくとも本稿で記しておきたい。

南米内陸部のパラグアイは現在に至り、米国やブラジルに次ぐ、世界的にも五指に入る大豆の輸出国である。とまれこのパラグアイは、その近現代史を経るなか、南米諸国においても最も貧しい国のひとつとして目されてきた。

肥沃な大地や有り余るほどの河川の水量を有しながらも、それらを十分に活かした近代国家発展の途を辿ることができなかつたのだ。

こうしたなか、パラグアイの貿易歳入の筆頭へと大豆生産を引きあげたのは、他ならぬ（おもには戦後の）日本から移民した人たちであった。

戦後の海外移住政策によって、「向こう（南米）に行けばふんだんに肥沃な大地と降り注ぐ太陽が」と言われて移住した者たちを待っていたのは、一人頭数十、数百 ha という開墾できるならば無尽蔵に得られる土地ながら、土地の境界線など皆目検討のつかないただの原生林であった。現在に至り、入植した者たちは、それはたいそう立派な何百 ha という超巨大大豆農家となつてはいるが、それはきわめて限定された者たちであり、むしろ入植した直後、とたんに諦めてパラグアイの首都アスンシオンや隣国アルゼンチンのブエノスアイレスなどへと転職して移り住んだ者の方が多くと現地の人たちはいう。

とまれ大豆の世界的な消費形態は、ほとんどが搾油用であり、大半が遺伝子組み換えの大豆である。ただ、日系人たちの作る大豆は、その後、国際協力事業団（JICA）との協働の末、遺伝子組み換えではない「安心・安全」な豆腐や納豆などに向けた大豆を提供している。彼ら彼女らはバブルも弾けたこの 21 世紀現代日本社会とて、国内に暮らす日本人の日常生活を支える、不可欠な役割をずっと担っているのだ。

二点目は、日本へと 1990 年代以降「デカセギ」にやってきた日系人である。日本から赴任、あるいは在パラグアイの日系人合わせた外務省の数値では「約 1 万人（推定）」⁹⁾の傍ら、在日日系パラグアイ人 2000 人強¹⁰⁾が現在、日本の都市部のどこかの喧騒に混じって日々、働いている。こうした彼ら彼女らはもはや、「拓魂不滅」で渡米した日本人ではなく、時には「ガイコクジン」たる「他者」として扱われる単純労働者としてである。

2005 年、本稿で「奥中山」と呼んできた地の行政上の地名が、「岩手県二戸郡一戸町小繫字西田子〇〇番地」ではなく「岩手県二戸郡一戸町奥中山字西田子〇〇番地」となった。隣の「小繫」からの「独立」とでも言えようか。これはたんなる行政上の変更ではないからだ。JA の奥中山支部長は筆者に言った。「奥中山高原ブランド」とした高冷地野菜や酪農に関しては、こっち〔JA の奥中山支部〕で扱う量が〔小繫に比べて圧倒的に〕増えたのに、〔住所が〕小繫と同じではどうも便が悪い。それもあって奥中山は奥中山として扱うようになったんです」。

そしてここには次の事実も加えておくべきだろう。冒頭に載せた地図でい

う、国道や鉄道の東側エリア一帯、つまり「奥中山」ではなく「中山」や、「宇別」「摺糠」などといった、つい半世紀ほど前までは、「奥中山」がこれら地域とは違うのだ、という分節の母体となった昔ながらの字の農産物も、このJAを通して「奥中山高原」ブランド産として扱われている。地理的気候的には同じタイプの地で同じように生産されたのだから、一緒にして当然であろう。すなわち、奥中山は小繋から「独立」するばかりか、かつての「中山」までをも飲み込んで己の個性を活かした農業地帯となったのだ。

本稿は以上である。何の変哲もないようにみえる山奥に潜む奥中山は、決して孤立して閉じたものではなく、つねに近現代の世界史と繋がってきた。

そして現在、奥中山でも一二を争う篤農家らは、フィリピンからの農業研修生を数名雇い、いわば日本の新しい形ともいえる営農を展開している。奥中山は一度も閉じたことなどない。だからとって、奥中山が特殊な事例であると捉えるのも誤りである。地域史というものそのものの叙述いかんの問題だと筆者は考える。地図で切り取った地域の範囲内に定住する人のみを地域史の登場人物として、その他の人たちを「移出民」「離村者」「脱落者」などと切ってしまうのではない、いわば属地主義ではなく属人主義の地域史が、いま求められているような気がする。

グローバリゼーションのもと、いともたやすく情報や資本のみならず人までもが越境する現在、「国境を越える」ではなく「越えた」とされる国境線そのものが、越境する者たちの視座から対象化されるべきではなかろうか。

注

- 1) 本稿は、文科省科研費（課題番号 19H01583 ; 16K07927）での作業をもとにおこなわれた。
- 2) 四家則至（袖ヶ沢分校教諭）編集文責、1973『閉校のしおり』奥中山小学校袖ヶ沢分校
- 3) 一戸町広報編集委員会、2012『広報いちのへ』特集：国営馬淵川沿岸農業水利事業が完了、8月号、p. 4
- 4) Nikolaj Frederik Severin Grundtvig (1783-1872年)。デンマークの牧師。同時に詩人、哲学者、教育者でもあり、デンマークの近代化に強い影響を残した。
- 5) 一戸町広報編集委員会、2012『広報いちのへ』前掲書、p. 5
- 6) 小麦の外皮で、良質な家畜の餌として価値があった。
- 7) 「戦後の移民政策については研究自体少ないうえ、農業移民を所轄した農林省への着目は近年はじまったばかり」[伊藤、2016]と、伊藤も述べるように、戦後日本から南米への農業移民に関してですら、研究そのものの蓄積はきわめて薄い。そして戦後の日本からの海外移住にまつわる研究と、南米への移民研究には大きな断絶がある。
- 8) 旧いわて奥中山農協、n.d.「全体バース」『奥中山高原ルネサンス計画』旧いわて奥中山農協

所蔵

9) 外務省「パラグアイ共和国基礎データ」(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/paraguay/data.html>、2019年9月21日閲覧)

10) 法務省「国籍・地域別 在留資格別・総在留外国人2018年12月末」、『e-Stat 統計で見る日本』(http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html、2019年9月21日閲覧)

参考文献 (ただし本論で一度限り注にて言及した資料は省いている)

蘭信三, 1988「満州開拓団を母体とする戦後開拓集落における「共同性」—熊本県東陽開拓農協の事例—」『ソシオロジ』33(1), pp. 115-137.

伊藤淳史, 2016「戦時・戦後日本農民政策史に関する研究」文科省科学研究費助成事業、研究成果報告書 (<https://kaken.nii.ac.jp/file/KAKENHI-PROJECT-24780212/24780212seika.pdf>、2019年9月10日閲覧)。

(〔岩手年鑑, 2000〕宮澤徳雄編集, 2000『岩手年鑑 2001年版』岩手日報社

江刺家磐男, 1965「奥中山開拓者の集団農業移住について」『岩手県奥中山開拓者の集団南米農業移住: 農業協同組合における推進事例』農業拓植協会、pp. 23-83.

奥中山教会, 1995『み恵みふかし 奥中山教会四十年史』自費出版。

(〔北上山地〕河北新報盛岡支社編集部編, 1973『北上山地に生きる』河北新報盛岡支社編集部、高瀬雅弘・村上亜弥, 2011「戦後開拓地のライフヒストリー」『弘前大学教養学部紀要』No. 105, pp. 33-45.

高瀬雅弘, 2012「戦後開拓地のライフヒストリー (2) —岩手上郷分村開拓における若者たちの職業経歴の再構築過程」『弘前大学教育学部紀要』、No. 107, pp. 15-27

(〔拓魂不滅〕岩手県開拓振興協会編, 1999『拓魂不滅 戦後開拓五十年誌』岩手県開拓振興協会、

永江雅和, 2012「戦後開拓政策と社会関係資本 ——兵庫県草加野開拓地の事例」『社会関係資本研究論集』No. 3, pp. 91-108.

農業拓植協会, 1965「岩手県奥中山 (総合) 農業協同組合における海外集団農業移住事業の推進事例 —農業協同組合における推進事例」(社団法人) 農業拓植協会。

野添憲治, 1978『海を渡った開拓農民』日本放送出版協会。

原田由紀乃, 1998「戦後開拓地における集団の組織化と変容」『人文地理』50(2), pp. 84-99.

八重樫芳子, 2016『わたしの奥中山』自費出版。

安岡健一, 2014『「他者」たちの農業史』京都大学学術出版会。

(〔夢・人・大地〕奥中山開拓四〇周年記念誌編集委員会事務局編, 1978『夢・人・大地』奥中山農業組合。

謝辞

本稿執筆において、あまりにも多くの方々のご協力・ご助力を賜った。まずは敬称を略させていただいたことをお詫びしたい。そのうえで、とりわけ奥中山初代開拓団長の義理の娘である八重樫芳子氏、本稿の主人公ともいえる村山敬一氏、こうした方々と筆者をつないでいただいた徳永映子氏など、奥中山にてお世話になった方は挙げきれない。また盛岡市のJAZZ喫茶のマスター高橋了氏、『岩手日報』論説委員の黒田大介氏など、多くの方が岩手について何もわかっていない筆者に、我慢強く付きあっていただいた。こうした岩手の方々へ、心から感謝の意を表したい。

(なかた・ひでき 社会理論・動態研究所)